

Council for Exceptional Children 2016年次総会参加 及びセントルイス市内学校訪問についての報告

神山 努
(情報・支援部)

要旨：本稿は、2016年4月13日から16日にアメリカ合衆国ミズーリ州セントルイスにおいて開催された、Council for Exceptional Children の年次総会における、発表研究の動向を中心に参加報告した。2016年の年次総会では、自閉スペクトラム症に関するセッションや、調査研究に関するセッションが昨年と比較して多くあった。また、セントルイス市内の特別学校 (special school) の訪問についても報告した。セントルイスでは、障害のある児童生徒のほとんどが地域の公立学校で教育を受けていたが、6校の特別学校が設置されていた。今回はそのうちの1校であるニューエナー高等学校 (Neuwoehner High School) を訪問した。ニューエナー高等学校は自閉スペクトラム症、知的障害、肢体不自由など、様々な障害のある高等学校段階の生徒を対象としており、学校全体で生徒の適切な行動を伸ばすプログラムである、スクールワイドポジティブ行動支援 (schoolwide positive behavior intervention and support) に取り組んでいた。

見出し語：Council for Exceptional Children, 特別学校, ポジティブな行動支援

I. はじめに

Council for Exceptional Children (以下、CEC) は1922年に設立されており、米国を中心に活動している。障害のある子どもやギフトッド (生まれつき才能がある、優れた知能を持つ) の子どもの成功を進める、熱意がある教育者の専門的団体、としている。その活動範囲は幅広く、特別教育管理職会議 (Council of Administrators of Special Education) や行動障害を有する子どもに関する会議 (Council for Children with Behavioral Disorders) など、18の部門 (division) を有しており、障害のある子どもの教育に関する、非常に大きな学術団体である。

国立特別支援教育総合研究所では、これまでもCECの年次総会に参加して、研究発表や、米国の特別支援教育に関して情報収集するとともに、年次総会が開催された地域の学校等を訪問してきている (神山・齊藤, 2016; 齊藤・熊田, 2014)。本稿ではCEC 2016年次総会と共に、年次総会が開催されたセントルイス市内の特別学校 (special school) の訪問について報告する。

II. Council for Exceptional Children 2016年次総会

1. 年次総会の概要

2016年で CEC 年次総会は第92回となり、4月13日から16日までの4日間、米国のミズーリ州セントルイスで開催された (写真1, 2参照)。年次総会のセッションは、教材や指導法のデモンストレーション (Demonstration)、CEC内の各部門におけるミッションに関する課題についてのセッション (Division Showcase Sessions)、関係業者による展示 (Exhibitor Showcase Sessions)、招待セッション (Featured Sessions and Special Focus Sessions)、複数名によるプレゼンテーション (Multiple presentations)、一つのトピックについてのパネルセッション (Panels)、ポスター発表といった、様々な形式で行われていた。その他に、CECの各部門におけるレセプション等も開催されていた。

CEC年次総会は専用のウェブサイトにおいて、年次総会終了から約6か月までは、年次総会内で行われた研究発表に関するセッションの情報が検索できるようになっていた。セッションによっては発表者

表1 年次総会の各メインピックに該当するセッション数

トピックテーマ	件数	
	2015年	2016年
全件数	714	820
アカウンタビリティ・大規模アセスメント	11	7
特別教育における芸術	11	12
自閉スペクトラム症	55	88
協働やインクルーシブの実践	47	50
文化や言語の多様性	44	45
ギフトティッドや才能	15	9
国際的プログラム・サービス	21	21
特別教育の教員の有効性測定	20	11
支援者養成	51	42
パイオニア・歴史的見解	2	5
調査研究	42	85
STEM (Science, Technology, Engineering and Math)	23	22
テクノロジーやメディア	42	47
行政・スーパーバイズ (Administration/Supervision)	33	34
アセスメント	25	27
キャリア発達・移行	35	47
コミュニケーション障害・聴覚障害	16	14
幼児期 (Early Childhood)	30	24
知的障害	30	1
学習障害	30	37
保護者・家族・学校のパートナーシップ	39	28
運動障害・健康障害・重複障害	13	12
公共政策	14	21
RTI：多層システム	40	62
特別教育の仕事を始めよう方略	10	7
視覚障害	15	16
行動情緒障害		46

* 「行動情緒障害」の категорияは2015年にはなかった



写真1 CEC年次総会会場

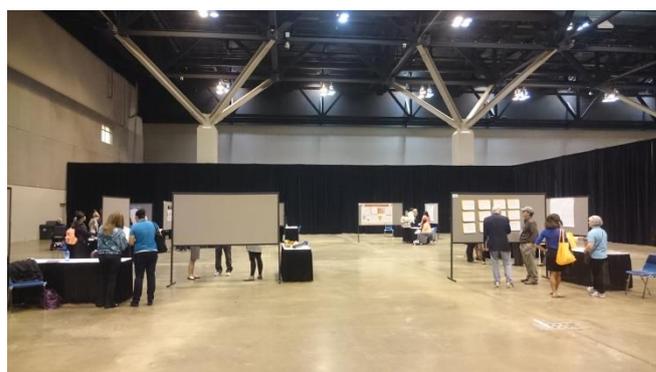


写真2 ポスター発表会場

により発表資料がアップロードされていた。各セッションは発表者により、27のメインピックのいずれかに分類されていた。

2015年と2016年のそれぞれの年次大会における、各メインピックのセッション数を表1に示した。全セッション数は2015年が714件、2016年が820件と、100件近く増えていた。トピックテーマ別に見ると、2016年は「自閉スペクトラム症」に該当するセッションが最も多く88件と、昨年より33件増加していた。次いで「研究」に該当するセッションが多く85件と、昨年より43件増加していた。研究発表の内容については、例えば「自閉スペクトラム症」に該当するセッションでは、自閉スペクトラム症のある子どもに対する、通常学級場面で同級生と共に、社会的スキルを学習する介入の研究や、教員に対する、自閉症スペクトラムのある子どもの教育に関する専門性向上についての、学区規模の研究等が報告されていた。一方、「研究」では問題行動に関する介入研究の文献レビューや、大規模な読みの指導に関する研究など、幅広い内容が含まれていた。

会場の様子では、「すべての児童生徒が成功するための法」(Every Student Succeeds Act : ESSA)に関するセッションに、多くの実践者や研究者が参加していた。ESSAとは「どの子どもも置き去りにしないための法」(No Child Left Behind Act of 2001 : NCLB)を改定する形で、2015年12月に米国において可決された法であり、セッションではESSAが障害のある子どもに対する教育や学力達成の評価にどのような影響があるのか等について議論がなされていた。

参加者は米国のほかに、韓国や中国などアジア諸国の研究者や留学生等もおり、ポスターセッション等においてそのような参加者と意見交換することができた。質問の内容は、日本において障害のある児童生徒の通常学級における在籍状況や、そのような児童生徒に対する教育的配慮の状況についてなどであった。

Ⅲ. セントルイス市内特別学校の訪問

CEC年次総会と併せて、セントルイス市内の特別学校を、セントルイス市内の教育事務所を介して訪問した。ミズーリ州のWebサイトによると(Missouri department of elementary & secondary education ; <https://dese.mo.gov/>)、セントルイス市内には22の学区(school district)があり、約22,000人の児童生徒に対してIEPが作成されており、特別教育が提供されていた。特別教育が提供されている児童生徒の9割以上が地域の学校に在籍していたが、市内に特別学校が6校設置されていた。今回はそのうちの1校の特別学校である、ニューエナー高等学校(Neuwoehner High School)を訪問した(写真3, 4, 5参照)。

1. ニューエナー高等学校の概要

ニューエナー高等学校は、知的障害、自閉スペクトラム症、肢体不自由など、様々な障害を有する14から21歳の生徒が在籍する特別学校である。セントルイスの特別教育に関する教育事務所と隣接している。校内には、教員のほかに、OT、PT、STや音楽療法士等、様々な専門職が関わっており、各専門職が指導や準備に使用する部屋が設置されていた。



写真3 ニューエナー高等学校の外観



写真4 ニューエナー高等学校の教室



写真5 生徒が学習したプリント

*確定申告締切日(Tax Day)をイラストにより学習したプリント

ニューエナー高等学校のミッションは、生徒が成功するための困難に取組み、高い期待を達成することとし、ビジョンは生徒の成人期の生活への移行が成功するよう取組むこととしている。2014年にはNational School of Characterを受賞するなど、学校の業績も認められている。

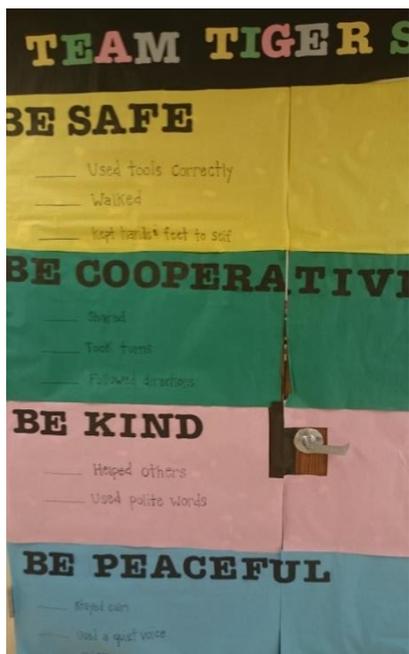


写真6 ニューエナー高等学校における適切な行動を示した表

ニューエナー高等学校に在籍する生徒の障害の状態は様々であり、指導内容も学級によって様々であった。清掃や作業など卒後の職業を意識した内容、生徒の実態に応じた作業的な学習内容、教科学習的な内容など様々であった。教科学習的な内容については例えば、社会に関する用語や概念を、イラストを用いて学習する等が扱われていた。このような内容は、全米で統一された教育内容に関する基準である、コモン・コアスタンダード（野口・米田，2014）をふまえて選定されていた。

2. ポジティブな行動支援（positive behavior intervention and support）の取組

ニューエナー高等学校の特徴として、学校全体でポジティブな行動支援（positive behavior intervention and support；Carr, Dunlap, Horner, Koegel, Turnbull, Sailor, Anderson, Albin, Koegel, & Fox, 2002）に取り組んでいた。PBISとは、障害のある人々の生活の質が向上することを目的に、個々の適切な行動を非嫌悪的な教育的方法により増やし、その結果として問題行動が減少することをねらうプログラムとされている。2004年に米国の障害のある個人教育法（Individuals with Disabilities Education Act：IDEA）

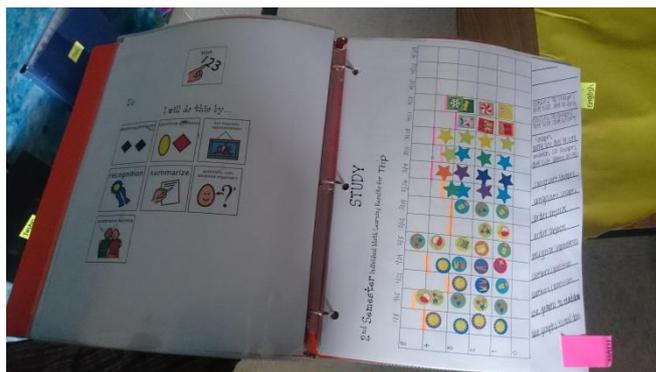


写真7 生徒の個別ファイル例



写真8 生徒の個別ファイル置き場

*生徒はいつでもファイルを参照できるようになっていた

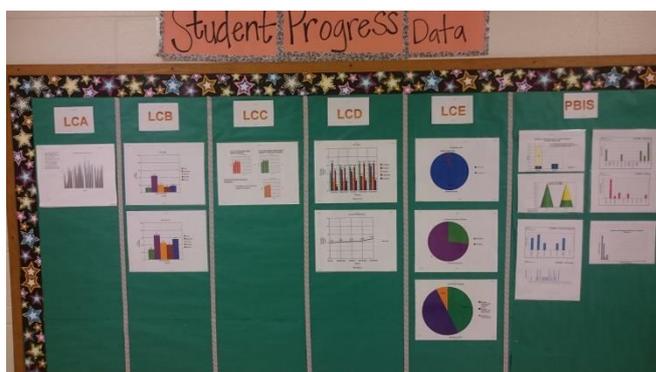


写真9 各教室における目標達成の状況

において、PBISの方法論が、問題行動を示す児童生徒に対する効果的方法として推奨された。

近年、学校に在籍するすべての児童生徒の適切な行動を伸ばすために、PBISが学校規模で取組まれるようになってきており（Crone & Horner, 2003）、ミズーリ州でも多くの学校がPBISを学校規模で実施していた。その方法の特徴は、すべての児童生徒に

対するユニバーサルな行動への指導・支援, ユニバーサルな指導・支援だけでは十分に効果が示されない児童生徒に対する小集団による指導・支援, それでも十分に効果が示されない問題行動を示す児童生徒に対する個別的な指導・支援を, 階層的に行うこととされている。

PBISにおけるユニバーサルな行動への指導・支援の1つに, 学校内の各場面において求められる適切な行動を明確にすることがある。ニューエナー高等学校では, 校内において求められる行動を, 「安全, 協力, 優しさ, 穏やか」(be safe, be cooperative, be kind, be peaceful) にまとめており, それぞれの具体的な行動を, 校内の場面ごとに具体化し, 表を用いて, 生徒に視覚的に示していた(写真6参照)。また, 各教室の生徒の実態に応じて, 文字を中心にして適切な行動を示す, イラストやシンボルを用いて適切な行動を示すなどの工夫がなされていた。

各生徒の評価に関して, 生徒は個別ファイルを持っており, 生徒それぞれが適切な行動をどの程度とっているか, 学習目標がどの程度達成されているかが, そのファイルにまとめられていた(写真7, 8参照)。そのファイルを参照することで, 生徒は自らの課題とその達成状況を把握し, 次にすべきことを理解するようにしていた。ファイルは生徒の実態に応じて, 絵やシンボルなど視覚的に示すといった工夫がなされていた。また, 学級ごとの行動や学習に関する目標の達成状況がデータとしてまとめられ, 校内の廊下に掲示されていた(写真9参照)。

Ⅲ. おわりに

今回のCEC年次総会への参加からも, 米国における障害のある子どもの教育に関する実践や研究を中心に, 様々な情報を得ることができた。また, 今回の参加においても, アジア諸国からの参加者を中心に, 各国の特別支援教育について協議できたことで, 日本の特別支援教育の現状や課題を考察することができた。米国も, コモン・コアスタンダードやESSAなど, 障害のある子どもの教育に影響する様々な動向があり, 今後もこのような会に参加して, 継続して情報収集する必要があるといえる。

セントルイス市内の特別学校の訪問では, 高等部段階にあたる障害のある生徒に対する教育を実際に参観することができた。また, 米国のIDEAにおいても推奨されているPBISの, 学校規模での取組を見学することができた。今後は, 米国における障害のある子どもに対する教育について, 文献を介して情報収集するとともに, 実際の様子についての視察訪問や現地調査を重ねることが, 我が国におけるインクルーシブ教育システム構築を検討する上で大変有効であると考えられる。

引用文献

- Carr, E. G., Dunlap, G., Horner, R. H., Koegel, R. L., Turnbull, A. P., Sailor, W., Anderson, J. L., Albin, R. W., Koegel, L. K., & Fox, L. (2002). Positive behavior support: Evolution of an applied science. *Journal of Positive Behavior Interventions*, 4, 4-16.
- Crone, D. A. & Horner, R. H. (2003). *Building positive behavior support systems in schools: Functional behavioral assessment*. New York: Guilford Press.
- Crone, D. A. & Horner, R. H. (2013). スクールワイドPBS—学校全体で取り組むポジティブな行動支援—(野呂文行・大久保賢一・佐藤美幸・三田地真実, 訳). 二瓶社. (Crone, D. A. & Horner, R. H. (2003). *Building positive behavior support systems in schools: Functional behavioral assessment*. New York: Guilford Press.)
- 神山努・齊藤由美子(2016). 平成27年度 Council for Exceptional Children 年次総会参加及びサンディエゴ市内学校訪問についての報告. 国立特別支援教育総合研究所ジャーナル, 5, 44-49.
- 野口晃菜・米田宏樹(2014). 特別学級・代替学校における障害のある児童生徒の通常教育カリキュラムへのアクセスの現状と課題—米国イリノイ州第15学区区を中心にして—. 障害科学研究, 38, 117-130.
- 齊藤由美子・熊田華恵(2014). Council for Exceptional Children 年次総会参加及びテキサス盲学校訪問についての報告. 国立特別支援教育総合研究所ジャーナル, 3, 24-29.